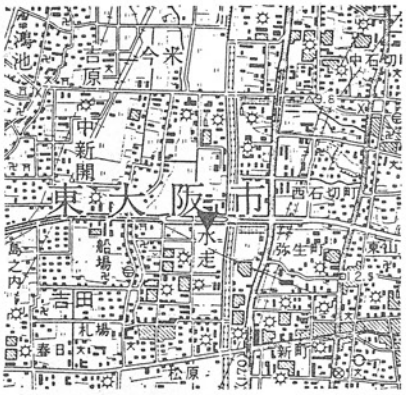
大阪・水走（みずはい）遺跡

1 所在地　大阪府東大阪市水走
2 調査期間　一九八三年（昭58）五月～一一月
3 発掘機関　東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会
4 調査担当者　吉村博恵・阿部嗣治
5 遺跡の種類　集落跡・居館跡
6 遺跡の年代　弥生時代・古墳時代・奈良～安土桃山時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

水走遺跡は、河内平野北東部の沖積地に位置し、標高約四mを測る弥生時代から安土桃山時代の複合遺跡である。一九八〇年より発掘調査を毎年実施しており、遺跡の主体が中世の環濠集落及びそれを取り巻く生産跡であることが徐々に明確化してきている。具体的には、一三世紀～一四世紀代の環濠と考えられる大溝、集落の西限を示す旧河道、環濠と旧河道の間に存在する柱穴群・土壙墓・土壙群、さらには三層にわたる整地層などである。生産跡の遺構としては、用水路と考えられる大溝とそれに伴う堤防状遺構・水田などである。遺物は、土師器・瓦器・陶磁器などの雑器類、漆器・下駄・曲物・人形・木簡などの木製品、刀子・鏃・庖丁・銭貨などの銅・鉄製品が多数出土している。これらの遺構・遺物より本遺跡は、一二世紀中頃以後、当地（河内郡有福名水走里）を開発し、私領化した水走氏の開発、あるいは領地支配の拠点であると考えられる。



（大阪東北部）

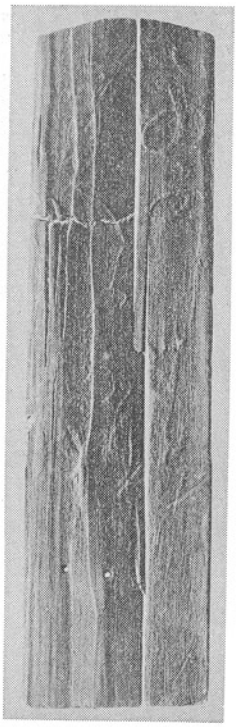
さて木簡は、前記の生産跡地域と考えている遺構群中の落ち込み状遺構より出土した。検出長一〇m、検出幅六m、深さ六〇cmを測る不定形な落ち込みである。遺物は本木簡の他、人形・曲物・下駄・ヘラ状木製品・土師器・瓦器など多数出土した。土器から見て一二世紀末から一三世紀初頭である。

8 木簡の釈文・内容

(1)
「ふなことも
□くすえ□□也。（穿孔）
八月五日　（穿孔）
」

217×57×2　011

墨書はすでに消えているが、文字が浮かび上がっているため三文字を除いて判読可能である。木簡の左下方に釘穴と思われる円孔が



二ヵ所存在する。文字の内容は適確には判読できないが、大意としては、舟子たちに何かを据えつけるように伝えたか、指示したものと考えられる。

（阿部嗣治）

昭和五八年度大宰府出土の木簡

昭和五八年度の大宰府史跡の発掘調査は、政庁前面の県道関屋―山家線と御笠川にはさまれた地域で数次にわたり行われたが、その概報が刊行された。そのうち特に不丁官衙地区南端の第八五次調査では、南北溝中から五八点に及ぶ木簡が出土した。内容は付札が二〇点を占め注目され、北方の蔵司地区付近で投棄された可能性が指摘されている。

福岡県教育委員会九州歴史資料館発行

『大宰府史跡　昭和58年度発掘調査概報』

木簡研究　第三号

巻頭言――中国簡牘呼称についての提言――　大庭　脩

一九八〇年出土の木簡

概要　平城宮・京跡　平城京左京（外京）五条五坊七坪　藤原宮跡　稗田遺跡――下ッ道――　長岡京跡　大蔵司遺跡　西沖遺跡　御殿・二之宮遺跡　野路岡田遺跡　多賀城跡　漆町西遺跡　桜町遺跡　白山橋遺跡　御館遺跡　御着城跡　鵤・城山遺跡　草戸千軒町遺跡　野田地区遺跡　観世音寺僧房跡　大宰府学校院跡東辺部

一九七七年以前出土の木簡（三）

平城宮跡（第二一次・第二二次北）　薬師寺　下岡田遺跡　池田　温

中国における簡牘研究の位相　狩野　久

庸米付札について　原　秀三郎

静岡県城山遺跡出土の具注暦木簡について　志田原重人

草戸千軒町遺跡出土の木簡――形態を中心に――

彙報

頒価　三五〇〇円　〒四〇〇円